



Title	リグ・ヴェーダ「一切神讃歌」の神観念
Author(s)	藤井, 正人
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1982, 15, p. 49-64
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/4109">https://hdl.handle.net/11094/4109</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## リグ・ヴェーダ「一切神讃歌」の神觀念

藤 井 正 人

### 一

リグ・ヴェーダの讃歌は、後のアヌクラマニー〔目録〕<sup>(1)</sup>によって、対象となつた神格に応じて種々の讃歌群に分けられている。その一つとして、「Viśve Devāḥに捧げられたもの (vaisvadeva)」という名称のもとに分類された一連の讃歌が、ここで取り上げる「一切神讃歌」である。ただ、インドラ讃歌がインドラを歌つたものであるように、一切神讃歌が Viśve Devāḥ (以下 VD と略す) を歌つたものであるとは必ずしも言えない。VD の言及が一切神讃歌に特に多いわけではなく、またその言及が全くない一切神讃歌が少なくないからである。ヤースカはニルクタの中で、「多神格に捧げられたものは何であれ、それは『VD に捧げられたもの』の代わりに用いられる」と述べている。<sup>(2)</sup> またブリハッド・デーヴァターの作者は、「その中に多くの神格の結合が見られるマントラ (祭文) を、ヤースカとシャーンディリアの両学匠は、『VD に捧げられたもの』と言う。行であれ、半詩節であれ、詩節であれ、讃歌であれ、多神格に捧げられたものはすべて、『VD に捧げられたもの』と言うことができる」と述べる。<sup>(3)</sup> アヌクラマニーの分類がこうした解釈を踏まえてなされたことを考えれば、「一切神讃歌」として分類された諸讃歌が、何よりも「多神格に捧げられたもの」として理解されていたことがわかる。

一切神讃歌は、多くの神々に対する呼びかけや祈願の集まりによって構成された讃歌である。一詩節に一神格ずつを配する規則的なもの、一詩節の中に多数の神名をはめ込んだもの、さらには讃歌全体がほとんど神名の羅列からなっているものまで様々な形があるが、この多くの神名を列挙する傾向は、一切神讃歌の主要な特徴となっている。L・ルヌーは、この神名列挙の特徴から一切神讃歌の成立について、「一切神文学のこうした面はすべて、短い連禱、列挙のリスト——祭儀書中のそこに保存されているニヴィッド（連禱句）に比べられる——から生じたものであり、それらの要素が時がたつにつれて、完全な讃歌を形成するように増幅され、連接されたであろうと考えられる」と推測している。<sup>(4)</sup>一切神讃歌が有名祭官族の家集に集中している事実も、その成立の基礎に連禱句の蓄積を考えるこの説によって説明される。

それでは、讃歌の材料として連禱句はどのように用いられたのか。次にあげる二つの例は、それについて一つの示唆を与える。

神々の幸多き好意は、行い正しき者たちに属する。神々の賜物は我らの方へ回り来たれ。我らは神々の友情を求め得た。神々は我らの寿命を延ばせ、「我らがより長く」生きるために。

我らは古来のニヴィッド（連禱句）によって彼らを呼ぶ、バガ、ミトラ、アデイテイ、過つことなきダクシヤ、アリアマン、ヴァルナ、ソーマ、両アシユヴィンを。幸運をもたらすサラスヴァティーが我らに安楽を授けんことを。（RV. I. 89, 2—3）

この讃歌が歌い出される以前に、「バガ」に始まる神名の列挙が連禱句として存在していたことは、「古来の(pūrva)」という語によって示されている。この連禱句が、前半の「神々 (devāḥ)」への祈願をうけて、各神格への呼びかけ

として用いられている。<sup>(5)</sup>

両アシユヴィンを「讃辞の」先頭に置き、恩恵〔を得んが〕ために。プーシヤンを先頭に〔置き〕。彼らは本来強力だから。敵意なきヴィシユヌ、ヴァータ、リブクシヤンが——、願わくは、われが神々をわが方へ向けんことを、好意〔を得んが〕ために。(RV. I. 186, 10)

この詩節は、ルヌーによって一切神讃歌の成立に関する彼の説の証拠として、あげられたものの一つである。第三行の短い列挙が主格になっているのに対して、それをうける最後の行の「神々」は目的格 (devān) になっている。ルヌーによれば、こうした破格の列挙は、文脈に合わしきれずに残った古い連禱句の断片であるという。<sup>(6)</sup> ここにおいても、先の例と同様、そうした古い連禱句は「神々」という語に対応するようにはめ込まれている。このように「神々」という語の前後に神名列挙が現れる例は、一切神讃歌に多く見い出される。<sup>(7)</sup> したがって、一切神讃歌の核になる部分は、連禱句の単なる集積によってではなく、それらを「神々」という対応語を介して文脈内に取り込むことによって成立したと言えよう。

神々は devān 以外に、「不死になるものたち (amītiān)」「祭るにふさわしきものたち (yajurān)」「ヴァスたち (vasavān)」等の語によっても示される。以下の例では、これらの語はいずれも神名列挙に対応している。

バガの神、富の〔賦与者〕サヴィトリ、アンシャ、財宝を取得するヴリトラの〔殺害者〕インドラ、リブクシヤン、ヴァーージャ、およびプランディは、我らに恩恵を与えよ、力強き不死なるものたちは。(RV. 5. 42, 5)  
……トリタ、リブクシヤン、サヴィトリ、駿馬を鼓舞するアパーム・ナパートは、〔我らの〕詩想と〔祭儀の〕勤めに満足した。我は汝らのために、祭るにふさわしきものたちよ、これらの捧げられた〔ことば〕を望

む。…… (RV. 2. 31, 6c-7a)

「もし、汝らの今の友情がないならば」、我らは汝らの未来の「友情」によって、一体何をなさん、ヴァスたちよ、昔の友情によって何を「なさん」。ミトラ・ヴァルナ、アデーティ、インドラ・マルトたちよ、汝らは我らに安寧を授けたまえ。(RV. 2. 29, 3)

このように、「神々」は一切神讃歌の要となる語である。このことは、讃歌全体の構成の上で、冒頭や結末の詩節がしばしば「神々」への祈願にあてられていることからもうかがわれる。<sup>(8)</sup>これは、一切神讃歌のような、神々への祈願を内容の中心とする讃歌にあつては当然のことであろう。神々への祈願とは、Aの神格にaを祈願し、Bの神格にbを祈願することではなく、神々全体の人間に対する恩恵を願つて、個々の神格が呼び求められることであるから。例えば、「インドラよ、……神々によって定められた聖句を〔授けよ〕。祭られるべき神々の好意を〔授けよ〕」(5. 42, 4)の一節は、神々と個神との関係をよく示している。また七・三五の讃歌では、各神格は'sam(幸い)」という語によって同じ祈願をうけ、最後の詩節で「神々」としてまとめられている。この神々全体の恩恵を求める人間の願いは、次のように歌われている。

このように、家畜に富む子孫のために、神々よ、死すべきもの(人間)は汝らを得んとする。神々よ、死すべきものは汝らを得んとする。(RV. 5. 41, 17abc)

ところで、devaの複数形であるdevāḥは、厳密には総称的な「神々」ではなく、複数性を表示しているにすぎない。その語自体には「神々」ほどの包括性はない。リブ三神のような少数の神をさすこともあれば、神名列挙をまとめる時のように神々の全体を表すこともある。このdevāḥの欠点を補うために、一切神讃歌では神々全体を表す

様々な工夫がなされている。一切神讃歌にその名を与えたVD（「すべての神々」）が第一にあげられるが、そのほかには、「各々の神（devodeva）」<sup>(9)</sup>「神の一族（daíyo jānāh）」または「天の一族（divyo jānāh）」<sup>(10)</sup>通常は「全アーリア人」を表すが、神々全体の意味に転用されている「五種族（pañca jānāh）」<sup>(11)</sup>などがある。

神々全体がいくつかの集団によって表されることもある。なかでも、アーディティヤ・ルドラ・ヴァスの三神群による表現が特に注目される。例えば、

我ら人間は汝らのために、神々の招待の「準備を」しよう。我らの祭祀を正しく前方へ導け。アーディティヤたち、ルドラたち、惜しみなく与えるヴァスたちよ、唱えられつつあるこれらの聖句を活気づけよ。（RV.

10. 66, 12)<sup>(12)</sup>

なにゆえこれらの三神群が神々を包括するものとして選ばれたのか。G・デュメジルの三機能説からの興味深い解釈は<sup>(13)</sup>しばらくおくとしても、各神群をそれぞれ天・空・地の三界に対応させている七・三五・一四の例から、三神群による神々の包括が三界観と関連していることがわかる。後に詳説するように、「天・空・地の神々」はVDの空間的な表現であるから、三神群をVDの下位区分と考えることもできる。<sup>(14)</sup>また、「インドラがインドラに属するものたちとともに、マルトたちがマルト」に属するもの」たちとともに、アディティがアーディティヤたちとともに、我らに庇護を与えんことを」（1. 107, 2cd）という奇妙な一節も、それに類似する一〇・六六・三を考慮すれば、この三神群を述べたものかもしれない。

さらに、「三十三」という数によって神々を総括する工夫もなされている。こうした箇所はリグ・ヴェーダ全体で十あるが、<sup>(15)</sup>この内の三つは一切神讃歌に属している。この「三十三」という数は、個々の神格を数え上げたもの

ではなく——神々の個数は三十三よりもはるかに多い——神々のすべてを数によって尽くそうとしたものである。なお、「三十三」は後のブラーフマナでは、ヴァス八神、ルドラ十一神、アーディティア十二神、その他の二神と説明されている。ここにも先の三神群が現れていることは注目される。<sup>(16)</sup>

このように、devāṁを補完するために、一切神讃歌においては神々を包括する種々の表現がとられている。神名列挙とdevāṁ、そしてこれらの包括表現によって、一切神讃歌は祈願の対象が神々全体であることをより明瞭にしていくなのである。ところで、一切神讃歌を理解する上でのVD等の重要性は、それらが多くの文脈で示す全体性的特徴にある。その文脈を考察することによって、一切神讃歌において祈願される神々が、いかなる視点からまとめられているかを知ることができるのである。

## 二

一切神讃歌は神々への祈願を内容の中心としていと述べたが、ここでのいう祈願は、リグ・ヴェーダの讃歌の内容についての、ブリハッド・デーヴァターの二分法「讃美(stuti)」と「祈願(śānti)」<sup>(17)</sup>をうけたもので、神々の恩恵(すなわち願い事が神々の賜物として実現すること)を求める行為またはことばをさしている。こうした神々への祈願は、当然予想されるように、祭祀の場で行われ、ある種の身体的な行事を伴っていた。次の一節はこの状況を伝えている。先行の詩節のVDや神名列挙をうけて、神々の先導者としてアグニに祈願して言う、

カンヴァ家の者たちは、恩恵を求めて汝(アグニ)に祈願する、祭儀の敷草を刈り、供物を持ち、  
 「祭儀の用具を」整える彼らは。(RV. 1. 14, 5)

これに対して、祭祀の場で行われる祈願の行為は、祭祀以外のものから区別されている。六・五二の一切神讃歌は、次のような強い調子の一文から始まっている。

天にかけて、地にかけて、我はそれを認めない。祭祀にかけて、そしてこの「祭儀の」勤めにかけて、「それを認め」ない。揺ぎなき山々が彼を押しつぶさんことを。極端な祭祀を行う者がうち捨てられんことを。

ここでは、「祭祀 (yajña)」と「祭儀の勤め (sāmi)」が「極端な祭祀 (atyajā)」と対立している。「極端な祭祀」の内容は明らかではないが、おそらく次の一節に語られる行為に関わっているであろう。

神々の招待において、ラクシヤス（魔物）たちに心を向ける者を、マルトたちよ、車輪なき「汝らの馬車」によって轢きたおせ。「祭儀を」勤めた者の勤めを非難せんとする者が、空しき望みをいだかんことを、

とえ彼自身」汗をかいて「励んだとしても」。(RV. 5. 42, 10)

祈願が祭祀に含まれるか否かは、「神々の招待 (devayin)」という点にかかっている。<sup>(18)</sup>この点を離れば（右の例では「ラクシヤスたちに心を向ける」という）、それはすぐさま祭祀ならざるものへと墮するのである。<sup>(19)</sup>

神々への祈願が祭祀の中に位置づけられていたことは、祈願の文脈の中に、祭祀の場を表す種々の表現が見い出されることからもうかがわれる。その中で最も多く現れるのは、「*ijā* (iha)」というばく然とした語である。サーヤナは注釈の中で、ほとんど常にこの語を「祭祀において (yajñe)」に置き換えている。また、単に「場 (śādana)」という語で示されることもある。「父祖以来の場」(5. 47, 1) あるいは「天則の場」(7. 36, 1)とも言われている。<sup>(20)</sup>そのほか「祭儀の敷草 (barhis)」より明瞭な「祭祀の場 (vidātha)」<sup>(21)</sup>「祭壇 (vedi)」等の語が見られる。ところで、祭祀に関連して特筆すべきは、VDとそれとの関係である。VDのほとんどの文脈は祭祀への何らか



の言及を含んでいる。例えば、VDは多くの箇所、「祭るにふさわしき(yajatra)」や「祭られるべき(yajña)」という修飾語をうけ、visve yajātrāḥ, visve yajñyāḥ, なすむ visve yajātāḥ という代用表現すら作っている。<sup>(21)</sup> また「祭祀において祭られるべきものたち」(7. 39, 4; 10. 93, 3)や「祭られるべき神々の内で特に祭られるべきものたち」(7. 35, 15)と呼ばれている。そのほか「祭儀を希望する」(3. 20, 1; cf. 7. 39, 4)「供儀を享受する」(1. 3, 9)「祭儀を見通す」(10. 66, 1)「祭祀を生み出す」(10. 66, 2)等。このVDと祭祀との結び付きは、次の一節に明瞭に示されている。

まかれた祭儀の敷草の上で、燃えたつ火のもとで、偉大な讃歌と拝礼によって、我は〔汝らを〕得んと欲する。この我らの祭祀の場にて、今日、祭るにふさわしきVDよ、供物に喜び酔いたまえ。(RV. 6. 52, 17)

祭祀は人間と神々の接点である。したがって、VDが祭祀に関係していることは、それが祭祀を介して人間と結び付いていることでもある。このことは、VDに固有のエピセットである「マヌ(人間)にとつて祭るにふさわしきものたち(mānor yajātrāḥ)」および「マヌにより祭られるべきものたち(mānor yajñyāḥ)」によつて示されている。<sup>(22)</sup>

この祭祀との関係は、神々全体、特にVDを表す「三十三の神々」にもそのまま当てはまる。後に取り上げる一・一三九・一一を除いて、すべての用例から祭祀との関わりを示す文脈を注(15)の順に取り出すと、「赤い馬を持ち、歌を愛<sup>め</sup>でる〔アグニ〕よ、彼ら三十三〔の神々〕を運び来たれ」(1. 45, 2)「祭儀の敷草に坐った三十三とさらに三の神々」(8. 28, 1)「三十三であり、マヌにより祭られるべき神々」(8. 30, 2)「アグニよ、妻を伴った三十三の神々を運び来たれ」(3. 6, 9)「三倍の十一の神々とともに、ここへ蜜酒を飲むために来たれ、

両アシュヴィンよ」(1. 34, 11)「三倍の十一のVDと<sup>(23)</sup>に<sup>(24)</sup>て、両アシュヴィンよ、ソーマを飲め」(8. 35, 3)「彼(アグニ)が三倍の十一〔の神々〕をここにて祭らんことを」(8. 39, 9)「三倍の十一の神々は汝らを仰ぎ見た。祭祀と〔ソーマの〕圧搾に満足して、両アシュヴィンよ、ソーマを飲め」(8. 57, 2)「ソーマ・パヴァーナよ、汝の秘密の場所に、三倍の十一の、かのVDは〔住する〕」(9. 92, 4)である。

一切神讃歌においては、VDと「三十三の神々」はともに、一つにまとめられた神々全体の呼び名である。それ故、それらが祭祀と結び付いていることは、祈願される神々の全体が祭祀と関連していることを示している。それでは、どのようにに祭祀と関連しているのか。このことは、神々の世界が一切神讃歌でいかに語られているかを検討することによって明らかとなる。

### 三

リグ・ヴェーダの神界は、ニルクタやブリハッド・デーヴァターの中で、「天・空・地」の三界観を基礎に整理・統一されている。<sup>(23)</sup>しかしリグ・ヴェーダにおいては、個々の神格が三界に分類されているわけではなく、いくつかに分割された空間が神々の世界として想定されているだけである。空間の分割の仕方にも、「天・空・地」のほかに種々の類型が見い出される。「天・地」、「天・地・水」、あるいはそこにいくつかの要素が加わって世界全体を意味することもある。

これらの神界の諸領域は、単なる神々の活動の場所と考えられたのではなく、それ自身神格として祈願の対象となっている。例えば三・五四の讃歌では、終末部の神々への祈願が、天・空・地・水への呼びかけから始まっている。

る。さらに、次のような例もある。

よき導きをもつアーディティヤたち、ルドラたち、ヴァスたちは、天地、大地、中空は、神々は連合して祭祀を支援せよ。祭儀のしるし（祭柱）を高く掲げよ。（RV. 3. 8, 8）<sup>(24)</sup>

第一行の三神群は、前述のように神々を包括する三つの集団である。これらの三神群と第二行の天・空・地によって、神界の全体が表されている。第三行はこの神界全体をうけている。「連合して（sajōsasah）」はVDの文脈に特徴的に現れる語であるから、第三行の「神々は連合して」はVDを暗示しているようである。そうであれば、この一節は、三神群・三界∥VDという図式を示すことになり、三神群が三界に関連し、VDの下位区分であるという先の推定の、今一つの根拠となろう。

右の図式がVDから三界へという逆の方向へ展開したものに、VDの空間配分がある。それは、VDの全体性を示すエピソードの一つとして、これを「各領域にいるものたち」に弁別する一節である。一切神讃歌にはこうした箇所が八つある。まず「天・地・水」による配分は、一・一三九・一一、六・五二・一五、七・三五・一一、一〇・六五・九の四例にみられる。一〇・六三・二では「天」が「アディティ（無限）」という語で示されている。一方、「天・空・地」による配分は六・五二・一三でなされている。この箇所の「アグニを舌とするものたち（agnihvāḥ）」は、「地にいるものたち」の代わりであろう。また、七・三五・一四と六・五〇・一一の「牝牛から生まれたものたち（gojāṭah）」が中空に関するものであれば、それぞれVDを「天・空・地」と「天・空・地・水」に分けている。<sup>(25)</sup>

各領域に配分されたものたちの数は、次のように述べられている。

神々よ、天に十一いて、地上に十一いて、威力をもって水中に十一住む神々よ、この供物を享受したまえ。

(RV. 1. 139. 11)

三領域に十一神<sup>ずつ</sup>を配するこの一節は、「三十三」という数が神々を数え上げたものでないことを示すとともに、それが「天・地・水」ないし「天・空・地」の考え方に関連していることを知らせる。「三十三」は多く「三倍の十一」(traya ekadasāśah)と記されているが、その場合の「三」はまさに神界の三領域を表している。

このように一切神讃歌においては、神界はVDと、あるいは同じことであるが「三十三の神々」と深く関わっている。とところですでに指摘したように、VDや「三十三の神々」は多く祭祀に関連して言及されている。とすれば、神界そのものも一切神讃歌では、人間の世界から隔絶した単なる神々の世界ではなく、祭祀との結び付きを持つ世界ではないだろうか。次の一節はそれを示唆している。

大河たちよ、三倍の三は詩人たち(神々)の共同の場であり、さらに三人の母を持つもの(アグニ)は祭祀の場における統王である。三は、天<sup>ツ</sup>則<sup>ツ</sup>を保持する若き妻、水の(女神)たちであり、日に三度、祭祀の場を支配する。(RV. 3. 56. 5)

「三倍の三」は、それぞれが三層に分かたれる神界の三領域を表している。<sup>(26)</sup>「共同の場(sadhāśha)」は、sadhā || sāha に基づく語で、「共に集まる場」を意味している。ここでは、「天・空・地」が神々の集<sup>あ</sup>場所として、第二行以下の「祭祀の場」に対応するように語られている。神界と祭祀との関連は、このほか「二つの祭祀の場(tvīti vidāthani)」という語によっても示されている。<sup>(27)</sup>祭祀の行われる場所を一般的に表す vidātha が、いくつかの箇所では神界の領域の意味に転用されている。これは、祭祀に集まる人間の状況を神々の世界に投影したものであろう。

ところで、「天・地・水」または「天・空・地」の内、大地はあくまでも人間の世界であり、人間が祭祀を行う場所である。祭祀の始まりを告げる一文、「広大な大地は背をもつて拡がった。〔大地の〕広き表面の上で、〔祭祀の〕火は燃え上がった」（7. 36, 1）は、これを歌っている。三界を領する神々への呼びかけや祈願は、この地上の祭祀の場で行われる。

VDよ、私のこの呼びかけを聞け、中空にいるものたちよ、天にいるものたちよ、アグニ（祭火）を舌とするものたちよ、あるいはまた、祭るにふさわしきものたちよ、この祭儀の敷草の上に座して、喜び酔いたまえ。

（RV. 6. 52, 13）

それ故、神界は祭祀の場を包む世界だと言えよう。神々は、「〔祭祀の〕場の至る所から我らの呼びかけを聞け」（1. 122, 6）「至る所から我らのもとへ来たれ」（1. 89, 1）と祈願されるのである。このことは、神々を各方に配して神界全体を表現する八・二八・三にも認められる。守護者たち（gopāh）として祭祀を取り囲む神々は、最後の行で、VDを暗示する定型句「全一族を伴って（sāvaya visa）」をうけている。さらに次の例では、祭祀の場が世界の中心であるという言明すらなされている。

私は汝に問う、大地の最果てを。私は問う、世界の臍（中心）のあるところを。……大地の最果てはこの祭壇であり、世界の臍はこの祭祀である。……（RV. 1. 164, 34—35 ab）<sup>(28)</sup>

このように、一切神讃歌の語る神界は、祈願の行われる場（祭祀の場）を中心とする「祭祀空間」とでも称し得る世界である。祈願の対象となった神々は、こうした空間を占める存在として表象されたのである。この祭祀を中心に空間的に把握された神々の集合体こそが、「天・空・地の神々」や「三十三の神々」と言われるVDの内容で

ある。アーデーティア・ルドラ・ヴ・アスの三神群も、おそらくは同じものを表している。

ところで、このように捉えられた神々は、もはや神話に語られる個性ある諸神格ではない。神名列挙に典型的に見られるように、神名のみによつて示される神々の集団の構成員であるにすぎない。三界配分の一例である一〇・六三・二で、VDが「すべての名(viśvā nāmāni)」という語で表され、それが「拝すべきもの・称賛すべきもの・祭られるべきもの」と述べられていることは、これを示唆している。<sup>(29)</sup> 神々の個性性を捨象するこの傾向は、一層押し進められた形で次の詩節に現れている。

最初の曙光が輝いたその時に、偉大なことばは牝牛の場で生まれた。神々の誓約を堅固にしつつ〔我は宣言する〕——神々のアスラの力(恐るべき神力)は偉大にして唯一のものである。(RV. 3. 55, 1)

最後の行は、当讃歌のモチーフとして全詩節で繰り返されている。個々の神格の特性を離れた、「神々」そのものの偉力(asuraiva)を、唯一絶対なものとして讃えるこの一節は、一切神讃歌における神々の記述の頂点に立つものである。<sup>(30)</sup>

#### 四

以上論じて来たように、神々の全体への呼びかけや祈願を主な内容とする一切神讃歌において、神々は、祭祀の場を中心とした空間を占める集団として捉えられている。一切神讃歌にその名を与えたVD(「すべての神々」)は、このように空間的に把握された神々の全体である。神々の集まる空間が「天・空・地」等に分割されているので、VDは「天・空・地の神々」あるいは各界十一神ずつの「三十三の神々」とも言われている。

ところで、個々の神格の個性性を越えて、神々を統一体として捉える一切神讃歌の神観念は、神々を統べる一者

への思弁を展開する、リグ・ヴェーダ第一〇巻のそれへ通じているように思われる。事実、「唯一のもの」に対する幾分まとまった思弁が、すでに一切神讃歌三・五四・五一九に見い出されるのである。また、最後に引用した詩節の「唯一のアスラの力」にも、一者に対する思弁の萌芽を認めることができる。一切神讃歌のリグ・ヴェーダにおける重要性は、まさにこの点にあると言えよう。

### 注

- (1) 「すべての神々」を意味するが、Rgyeda (以下 RV.) では術語的な価値を持つてゐない、Brahmanja 等では一の神群とみなされていることから、従来「一切神」等の固有名詞で置き換えられて来た。
- (2) Nirukta 12, 40.
- (3) Bṛhaddevata 2, 132—133.
- (4) Louis RENOU, "Les hymnes aux Viśve-Devāḥ," *Commemoration Volume in Honour of J. Nobel* (New Delhi, 1959), pp. 177—178. Cf. also RENOU, *Études védiques et paninienes*, IV (Paris, 1958), p. 5. 彼はその証左として、統語上の枠と一致しない省略や破格構文による列挙の存在をあげてゐる。
- (5) Cf. Scheftelowitz, "Die Nividas und Praisās," *ZDMG* 73 (1919), p. 38. 彼はこの箇所を nivida だ、Nivida-adhyāya 中の VD への nivida をこつてゐるが、VD への nivida の内容を検討すれば、それが一切神讃歌以前に存在したとは考えがたう。
- (6) RENOU, *EVP* IV, p. 5, n. 1.
- (7) 1. 14, 2—3; 90, 1—4; 106, 1—2; 107, 2—3; 122, 3; 2. 31, 1—2; 3. 56, 7—8; 4. 55, 1; 5. 42, 16—17 etc.
- (8) 1. 89; 107; 139; 186; 3. 56; 4. 55; 6. 50; 52; 7. 35; 8. 27; 28; 30; 83; 10. 35; 63—66.

- (9) 5. 42, 16; 43, 15.
- (10) 6. 49, 1; 52, 12; 10. 63, 17; 64, 17.
- (11) 6. 51, 11.
- (12) Also 2. 31, 1; 7. 35, 6; 14; 10. 66, 3.
- (13) Georges DUMÉZIL, "Mitra-Varuṇa, Indra, les Nāsatya comme patrons des trois fonctions cosmiques et sociales," *Studia Linguistica* 1 (1947), pp. 127-128. 彼にちれば、われらの三神群はアーリア社会の主権・武力・生産の三機能をそれぞれ代表し、それら三者によつて神々の全体が機能上、表現されているという。
- (14) Cf. 10. 125, 1ab.
- (15) 三十三神の言及箇所  
「三十三」——1. 45, 2; 8. 28, 1; 30, 2. 「三十三と妻たち」——3. 6, 9.  
「三十三の十一」——1. 34, 11; 8. 35, 3; 39, 9; 57, 2; 9. 92, 4. 「天地水に十一す」——1. 139, 11.
- (16) Cf. DUMÉZIL, *L'héritage indo-européen à Rome* (Paris, 1949), p. 216.
- (17) *Bṛhaddevatā* 1, 7.
- (18) Cf. also 10. 35, 14; 66, 12.
- (19) 祈願の特徴として、神々の恩恵 (āvas)・好意 (sumati, sumnā)・賜物 (rāti, rāthas) 等を求めることが繰り返され、神々と人間の関係が強調される点があげられる。
- (20) Also 1. 122, 6; 8. 27, 5.
- (21) *viśve yājñatrāḥ* : 1. 65, 1; 3. 57, 5; 6. 21, 11. *viśve yajñiṇyaḥ* : 4. 1, 20. *viśve yajñatrāḥ* : 2. 5, 8.
- (22) *mānor yājñatrāḥ* : 7. 35, 15; 10. 65, 14. *mānor yajñiṇyaḥ* : 8. 30, 2; 10. 36, 10.
- (23) *Nirukta* 第七章 *Bṛhaddevatā* 第一二章。
- (24) *Anukramanī* 中の讃歌や *yupastuti* と命名するが、引用詩節だけは *vaśvadeva* とも記している。
- (25) Cf. Maurice BLOOMFIELD, *Rig-Veda Repetitions* (Cambridge, Mass., 1916), p. 317.



- (26) Cf. Sayana ad 3. 56, 5; Karl F. Geldner, *Der Rig-Veda* (Cambridge, Mass., 1951) I, p. 403, n.
- (27) 6. 51, 2; 7. 66, 10; 8. 39, 9.
- (28) 「大地と祭壇は同じ拡がりを持つ」の意。
- (29) Cf. Jan GONDA, *Notes on Names and the Name of God in Ancient India* (Amsterdam, 1970), p. 8; 76.
- (30) 佐保田鶴治『インド正統派哲学思想の始源』(創文社、一九六三年)七ページ参照。なお、本稿を草するにあたってこの書に教えられるところが多くあった。ここに感謝します。

(大学院学生)